

趣旨説明

2020年代を通じて実現すべき高大連携

—生徒・学生が『持続可能な社会の創り手』となるために—

長谷川 豊（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長／京都府立大学 公共政策学部 准教授）



（スライド1）皆さん、こんにちは。今、黒坂先生から京都高大連携研究協議会の話をしていただきましたが、その下で高大連携推進室の室長を仰せつかっています、長谷川です。今回、「2020年代を通じて実現すべき高大連携」というタイトルで、記念講演、パネルディスカッションを行わせていただきます。第20回でなぜこのテーマで行うのかという趣旨説明をさせていただきます。

（スライド2）既に、ご案内の中で趣旨は述べていますが、昨年1月に『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」という答申が中央教育審議会でございました。詳細は、この後、荒瀬先生からご講演いただけたと思いますが、その中では「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」に焦点が当てられています。高校、大学の双方においても「教育の質、多様性や包摂性を高め、誰一人取り残すことのない教育を展開する」、このために高校と大学はどのような連携・接続

が求められるのかを考えたいということです。20回目のフォーラムですので、本協議会としての20年の歩みを振り返りながら、当初は「これまでとこれから」というストレートなタイトルも検討していましたが、「これから」を意識して先ほど紹介したテーマで進めさせていただくことにしました。

（スライド3）中央教育審議会答申では「持続可能な社会の創り手」を育てていくことの必要性が述べられています。既に2022年ですが、2030年に向けて2020年代を通じて、どのような「令和の日本型学校教育」を目指すのが答申の中で述べられています。とりわけ高校では「社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力や、社会の形成に主体的に参画するための資質・能力が育まれている」と。こうした高等学校教育を踏まえて、高校と大学とどのような連携や協働がこれから必要なのが、より重要になってきます。後ほど触れますが、現在諮問されている、新たな第4期の教育振興基本計画の中でも、より強調されている内容です。

（スライド4）本フォーラムを主催する「京都高大連携研究協議会」は、黒坂先生のお話にもありましたように「産・官・学」という京都ならではの人材育成を目指して、2003年5月に発足しました。その歴史を簡単に振り返らせていただきます。現在、このような体制で高大連携事業を進めていますが、ここに至るまでにさまざまな取り組みがありました。

(スライド5) 20年の歩みを振り返りますと、キャンパスプラザ京都ができる前から「京都・大学センター」が発足して、その後「大学コンソーシアム京都」という名称に変わり、95年に第1回のFDフォーラムが行われました。もう少し後の2000年代に入ってから、第9回FDフォーラムで、最初の高大連携教育フォーラムが開催されました。高大連携事業は2002年に始まり、2003年5月に本協議会が発足しました。その背景には、90年代の終わりに、大学に関わる大学審議会の答申、そして中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」、この大きな2つの答申があったことは言うまでもありません。

(スライド6、7) この20年の歩みである、本フォーラムのメインテーマをずらっと並べてみました。それぞれの詳細は省きますが、このようなテーマでフォーラムを行ってきたのは、国の教育改革の動向、とりわけ高校や大学の改革動向をよく踏まえる必要があったからです。大学の中で、あるいは高校の中で求められているもの、とりわけ学習指導要領が改訂されれば、それに関わる議論、また大学入試が変わるのであれば、そこに焦点を当てて取り組んできました。

(スライド8) とりわけ2012年に文部科学大臣からの諮問があり、14年に中央教育審議会答申、15年に「高大接続改革実行プラン」が出され、その後「最終報告」があったように、三位一体改革と呼ばれている「高大接続改革」が2010年代から急速に進められてきました。

(スライド9) 高校の先生方にとっては、学習指導要領の大きな改訂がございました。高大接続改革とほぼ軌を一にして、14年に文部科学大臣からの諮問、16年に中央教育審議会答申、18年に高校の学習指導要領の改訂があり、今年度から年次進行で改訂に基づく授業が行われ、24年度の終わりには、それに対応した入試があります。このような流れがあり、「高校

教育については」という説明の中で、大学入学者選抜に関わって「高大接続改革を進める」と明記される点は注目しておく必要があります。

(スライド10) 本協議会が取り組んでいる高大連携事業は、このフォーラムだけではなくありません。高校生、大学生、そして社会をつなぐ「高大社連携フューチャーセッション」。そして、高校の先生方の交流会。公立・私立を問わず、枠を超えて交流をする場ですが、今後は大学教職員を含めた「京都高校・大学教職員交流会」という形で展開していく予定です。

2010年代までは、高校と大学の先生方によって、新たなプログラムを開発して教育を行うという実践的な取り組み、また大学の取り組みを京都外に広げていく取り組みも行ってきました。キャリア教育やキャリア形成にも意識しながら、京都府北部地域や女子生徒を対象とした事業にも取り組んできました。

(スライド11) 第16回以降では、とりわけ入試で大きな変更があり、大学入学共通テスト実施に至るまでにもいろいろございました。

(スライド12) 大学では既に2040年というターゲットイヤーが設定されており、どのような大学像をそれぞれ設けて進んでいくのかという動きがございます。そのため、大学教育と高校教育との連携・接続部分だけではなく、大学そのものが今後どのように展開していくのかということが問われています。高校生の進路としての大学が、このような流れがある中で、高校とどのようにつなげていくのか・つながっていくべきなのか、今日の大きな議題になると思っております。

(スライド13) 先ほど申し上げました教育振興基本計画は、今年度が第3期の最終年度です。教育振興基本計画は5年ごとに設けられ、2030年にどのような社会像であるかを描き教育政策の重要事項を掲げていました。この間のコロナ禍やウクライナ危機という中で、第3期では、十分に解決できなかった課題が残されて

いると指摘し、現在、第4期計画が策定中です。

(スライド 14) 次期第4期計画に向けた諮問では「超スマート社会 (Society 5.0)」、第3期にもこの言葉は出ていましたが、今回は「ウェルビーイング」という言葉がより強調されています。DXとの関係の中で、デジタルとリアルをどのように最適な組み合わせにしていくのが議論の焦点になってきています。これは、高校でも大学でも言えることで、高大連携の「これから」を考えていくときには、この部分を押さえておく必要があると考えます。

(スライド 15) 以上の状況を踏まえて「2020年代を通じて実現すべき高大連携」のあり方としては、「持続可能な社会の創り手」をどのように育てていくのが、大きな課題になります。

(スライド 16) 今日は、午前と午後、記念講演では京都に大変縁のある荒瀬先生と溝上先生、続くパネルディスカッションでは伊藤先生、滝本先生、酒井先生にご登壇いただきます。先生方、どうぞよろしくお願いいたします。大変楽しみにしております。

(スライド 17) 以上、趣旨説明をさせていただきました。ありがとうございました。

スライド1

第20回 高大連携教育フォーラム
【京都高大連携研究協議会発足20年記念】

2020年代を通じて実現すべき高大連携
—生徒・学生が『持続可能な社会の創り手』となるために—

趣旨説明

大学コンソーシアム京都 高大連携推進室
長谷川 豊（京都府立大学）

スライド2

本フォーラム趣旨

- ・急激に変化する社会の中、「**持続可能な社会の創り手**」となる子どもたちの資質・能力を育むため、中央教育審議会は、2021年1月、『**令和の日本型学校教育**』の構築を目指して」を答申した。
- ・答申は、「**全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現**」に焦点をあてている。高等学校・大学双方が**教育の質、多様性や包摂性を高め、誰一人取り残すことのない教育**を展開する上で、**今、両者の連携・接続には何が求められ、どう考えて実践すべきなのだろうか。**

スライド3

中央教育審議会『**令和の日本型学校教育**』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、**個別最適な学びと、協働的な学びの実現**～（答申）2021年

1. 急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力

【社会形成】
■ 急速に変化する時代
■ 社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」
■ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」
■ 社会全体のデジタル化・オンライン化、DX加速の必要性

【個人成長】
■ 一人一人の児童生徒が、自分自身で可能性を開拓するときに、必要となる資質・能力を育成する
■ 豊かな人間的資質・能力を育成し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓く『**持続可能な社会の創り手**』になることができるようになることが必要

【応用】
■ これらの資質・能力を育むためには、デジタル技術等の活用が重要で、ICTの活用が必要不可欠

2. 2020年代を通じて実現すべき学校教育「令和の日本型学校教育」の姿

3. 2020年代を通じて実現すべき『**令和の日本型学校教育**』の姿

全ての子どもたちの可能性を引き出す

子どもの学び

■ 社会的・職業的自立に向けて必要な基礎となる資質・能力や、社会の形成に主体的に参画するための資質・能力が育まれている
■ 多様な関係機関との連携・協働による地域・社会の課題解決に向けた学びが行われている
■ 探究的な学びやSTEAM教育など教科等横断的な学びが提供されている

高等学校教育

スライド4

本フォーラム趣旨

- ・京都高大連携研究協議会は、学校間競争や個別の利害関係を乗り越え、「**産・官・学**」という京都ならではの**人材育成**を目指し、2003年5月に発足した。以降、本フォーラムを主軸とした様々な高大連携事業を展開し、2022年度は協議会発足20年目となる。

（出典）『リクルート カレッジマネジメント』No.234、2022年10月、p.87

スライド5

京都の高大連携・接続の20年の歩み

- ・1994年3月 **京都・大学センター**、発足
→1998年3月 財団法人**大学コンソーシアム京都**、名称変更
- ・1995年12月 **第1回FDフォーラム**開催
「21世紀の大学像と今後の改善について」（大学審答申1998年）、「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」（中教審答申1998年）
- ・2002年4月 **高大連携事業**開始
京都の大学「学び」フォーラム東京・大阪会場開催（～2007年度）
- ・2003年5月 **京都高大連携協議会**発足
京都の大学「学び」フォーラム京都会場開催（～2015年度）
- ・2004年2月 **第1回高大連携教育フォーラム**開催
第9回FDフォーラム（2003年度）**京都高大連携研究協議会発足記念**
テーマ **生徒が学生に成長するために**
第4分科会 連携例に見る高大連携の可能性
—京都の高大連携を中心に—

スライド6

高大連携教育フォーラム メインテーマの変遷

- 第1回（2003年度） **連携例に見る高大連携の可能性**
—京都の高大連携を中心に—
- 第2回（2004年度） **学びの接続を実現するために**
- 第3回（2005年度） **新局面を迎えた高大連携**
- 第4回（2006年度） **学力構造の変化と高大連携の可能性**
—新局面を迎えた高大連携Ⅱ—
- 第5回（2007年度） **高大連携のあり方を検証する**
- 第6回（2008年度） **高校新教育課程と接続教育の課題**
- 第7回（2009年度） **高大連携から接続教育への視座**
～高大で考える『生きる力』の育成～
- 第8回（2010年度） **新しい時代に求められる能力をどう育成するか**
～高大接続テストの持つ意味～

スライド7

第9回(2011年度) **新学習指導要領が求める学力とは**
 第10回(2012年度) **これからの時代に求められる学力・能力とは?**
 —教育の目標を明確化するために—
 第11回(2013年度) **新しい時代を拓く高大接続の「学び」とは**
 —京都からの発信—
 第12回(2014年度) **高大接続と学力形成**
 —達成度テスト(仮称)について考える—
 第13回(2015年度) **アクティブ・ラーニングへの模索**
 ～「教える」と「学ぶ」とのリンクを考える～
 第14回(2016年度) **いま、なぜ入試改革か?**
 ～教育改革のゆくえを探る～
 第15回(2017年度) **いま育成すべき力は何かをともに考える**
 —高等学校・大学の役割—

スライド8

「高大接続改革」=三位一体の改革

●国際化、情報化の急速な進展
 社会構造も急速に、かつ大きく変革。
 ●知識基盤社会のなかで、新たな価値を創造していく力を育てることが必要。
 ●社会で主体的に活動していくために必要な「学力の3要素」をバランスよく育むことが必要。

【学力の3要素】
 ① 知識・技能の確実な習得
 ② ①を基にした
 思考力、判断力、表現力
 ③ 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

大学入学選抜
 大学入学選抜の一体的改革
 高等学校教育
 大学教育

2012 文科大臣諮問
 2014 中教審答申
 2015 高大接続改革実行プラン
 2016 高大接続システム改革会議「最終報告」

(出典)大学入試のあり方に関する検討会議議(第18回)R2.11.27[参考資料2]大学入学選抜協基連資料集

スライド9

学習指導要領「改訂」等
 2014 文科大臣諮問
 2016 中教審答申
 2018 高校改訂
 2022 授業年次進行実施
 2024 改訂要領対応入試

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学び終えて社会に生かそうとする
 学びに向かう力・人間性等の育成
 生きて働く知識・技能の習得
 基礎的・基本的にも対応できる
 思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
 社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む

※高校教育については、些末な事象的知識の暗記が大学入学者選抜で問われることが課題となっており、
 そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革を進める。

何を学ぶか
 必要となる資質・能力を踏まえた
 科目の選択や目標・内容の見直し
 国際化教育の教科化、高校の教科目「公民」の
 等々で読む資質・能力を明確化し、目標や内容を構築
 する
 学習内容の精選は行わない。

どのように学ぶか
 主体的・創造的に学び(「アクティブ・
 ラーニング」)の観点からの学習態度の改善
 主体的な学び
 深い学び
 対話的学び
 深い学び

(出典)「改訂のポイント 学習指導要領改訂の考え方」https://www.mext.go.jp/content/1421692_6.pdf

スライド10

京都高大連携研究協議会が取り組む高大連携事業

2010年代半ばまでは・・・
 ・大学生を高校に派遣する試行から展開した高大の教員によって開発された教育プログラム(実践研究共同教育プログラム)
 ・大学の模擬授業や個別相談等、高校生が大学を知り、興味ある学問を発見するイベント(京都の大学「学び」フォーラム)

2010年代半ば・・・
 ・Kyotoカトリック
 ・北部地域生徒向けキャリア企画
 ・女子生徒向けキャリア教育企画など

《第1部》
 基調報告、実践事例報告、記念講演、シンポジウム、パネルディスカッション
 《第2部》
 教科や表現、入試・高大接続やキャリアなどの分科会

京都高校教員交流会
 2019年度から実施されている高校教員交流会。京都府内の高校教員が参加している。他校との情報交換ができ、交流が深まるとともに、近頃は教員が参加しやすい環境が実現している。

(出典)「リクルート カレッジマネジメント」No.234, 2022年10月, p.88

スライド11

第16回(2018年度) **いま育成すべき力は何かをともに考えるⅡ**
 —高等学校・大学の役割—
 ～次期高等学校学習指導要領と高大接続の本質～
 第17回(2019年度) **「教育の接続」としての入試改革～高校までの資質・能力の育成を大学でどう評価するか～**
 第18回(2020年度) **「教育の接続」としての入試改革Ⅱ**
 ～高校教育の指導と評価が変わる
 一高校・大学は入試と教育にどう向き合うか～
 第19回(2021年度) **探究的な学びから研究へ**
 —教育改革のジャンピングボードとなるためには—
 第20回(2022年度) **2020年代を通じて実現すべき高大連携**
 —生徒・学生が「持続可能な社会の創り手」となるために—

スライド12

大学・高等教育は2040年を展望して・・・
 中教審「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」2018

1. 2040年の展望と高等教育が目指すべき姿 ... 学習者本位の教育への転換

●必要とされる人材像と高等教育が目指すべき姿

予測不可能な時代を生きる人材像
 ●普遍的な知識・理解と汎用的技能を文理横断的に身に付けていく
 ●時代の変化に合わせて機動的に社会を支え、論理的思考力を持って社会を改善していく資質を有する人材

学習者本位の教育への転換
 ●「何を学び、身に付けることができたのか」十人十人の学習成果の可視化(個々の教員の教育手法や研究を中心にしたシステムを構築する教育からの脱却)
 ●学習者が生涯学び続けられるための多様な柔軟な仕組みと流動性

2040年頃の社会変化
 国連SDG(持続可能な開発目標)の達成と社会の持続可能性
 2040年頃の社会変化
 国連SDG(持続可能な開発目標)の達成と社会の持続可能性

●高等教育と社会の関係

「知識の共通基盤」
 ●教育と研究を通じて、新たな社会・経済システムを提案、成果を還元

研究力の強化
 ●多様な卓越した人材(イノベーション)の創出や科学技術の発展にも寄与

産業界との協力・連携
 ●雇用の在り方や働き方改革と高等教育が提供する学びのマッチング

地域への貢献
 ●「個人の価値観を尊重する生活環境を提供できる社会」に貢献

スライド 13

第3期教育振興基本計画(2018～2022年度)の最終年度

□ 「第3期教育振興基本計画(概要)」
2018年6月閣議決定

中央教育審議会教育振興基本計画部会(第10回)会議資料「次期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方(案)【概要】」、2022年11月

Ⅲ(2030年以降の社会を展望した教育政策の重点事項)

第2期計画の「自立」「協働」「創造」の方向性を継承し、以下の姿を目指す
《個人と社会の目指すべき姿》
(個人) 自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら
新たな価値を創造する人材の育成
(社会) 一人一人が活躍し、豊かで安心して暮らせる社会の実現、
社会(地域・国・世界)の持続的な成長・発展

《教育政策の重点事項》
○「超スマート社会(Society 5.0)」の実現に向けた技術革新が進展するなか
「人生100年時代」を豊かに生きていくためには、「人づくり革命」、「生産性
革命」の一環として、若年期の教育、生涯にわたる学習や能力向上が必要
○教育を通じて生涯にわたる一人一人の「可能性」と「チャンス」を最大化
することを今後の教育政策の中心に据えて取り組む

第3期計画期間中の成果

- ・(初等中等教育) 国際的に高い学力水準の維持、GIGAスクール構想、教職員定数改善と支援スタッフの充実 等
- ・(高等教育) 教学マネジメントや質保証システムの確立、認証評価のための法改正、連携・統合のための体制整備 等
- ・(学校段階横断) 教育費負担軽減による進学率向上、教育研究環境整備や長寿化、耐震化の実施 等

第3期計画期間中の課題

- ・コロナ禍でのグローバルな人的交流の減少や体験活動の停滞
- ・いじめの重大事態の発生件数や児童生徒の自殺者数の増加
- ・学校における長時間勤務や教師不足
- ・地域の教育力の低下、家庭を取り巻く環境の変化
- ・高度専門人材の不足や労働生産性の低さ
- ・教育改革に対する大学間の取組差、博士課程進学率の低さ 等

スライド 14

2040年以降の社会と教育は…第4期計画(2023～2027年度)策定中

社会の変化(2040年以降の社会)

- ・人口減少や高齢化、デジタルトランスフォーメーション、グローバル化や多様化、地球環境問題など
- ・変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の時代であり、先行き不透明で将来の予測が困難な未来

望む未来を私たち自身で示し、作り上げていくことが求められる時代

超スマート社会 (Society 5.0)	ウェルビーイング
一人一人の人間が中心となる社会	一人一人の多様な幸せであるとともに社会全体の幸せでもあるウェルビーイング (Well-being)
労働市場の構造や職業そのものの抜本的な変化	

次期教育振興基本計画の策定について(随時)【概要】2022年2月

○超スマート社会 (Society 5.0) に対応し、幼児教育・義務教育から高等学校、大学、高等専門学校、専門学校、大学院まで全生が連携性・一貫性を持ち、社会のニーズに応えるものとなるよう、教育や学習の在り方も大きく変容が求められる状況。「デジタル」と「リアル」の最適な組合せの観点から、コロナ後の教育や学習の在り方について検討することが必要。

○共生社会を実現していく上で、学習者の背景や特性・意欲の多様性を前提として、学習者視点に立ち、誰もが、いつでもどこからでも、誰とでも、自分らしく学ぶことができ、誰一人取り残されず、一人一人の可能性が最大限に引き出され、一人一人の多様な幸せであるとともに社会全体の幸せでもあるウェルビーイングが実現されるように制度等の在り方を考えていく必要。

スライド 15

本フォーラム趣旨

- ・20回目となる本フォーラムでは、高大連携・接続の歩みを振り返るとともに、「**持続可能な社会の創り手**」を育てる**高大連携教育の実現**について、当事者が同じ場で共有し、考える機会とする。

《第20回 メインテーマ》
2020年代を通じて実現すべき高大連携—生徒・学生が『持続可能な社会の創り手』となるために—

スライド 16

第20回 高大連携教育フォーラム
《第1部》 【京都高大連携研究協議会発足20年記念】

- ・**記念講演1 高等学校教育には何が求められているか～「令和の日本型学校教育」答申の描くもの～**
荒瀬 克己 氏(独立行政法人教職員支援機構 理事長)
- ・**記念講演2 トランジション実現のための影響の大きな高校・大学での学びを理論的、実証的に示す**
清上 慎一 氏(学校法人桐蔭学園 理事長／桐蔭横浜大学 教授)
- ・**パネルディスカッション**
どうすれば「持続可能な社会の創り手」を育成できるのか
コメンテーター 荒瀬 克己 氏、清上 慎一 氏
事例報告者
伊藤 恵哉 氏(京都府教育委員会 高校教育課 指導主事)
滝本 順之 氏(京都市教育委員会 学校指導課 指導主事)
酒井 淳平 氏(立命館宇治中学校・高等学校 教諭)

スライド 17

本日は、第1部、第2部とも、対面、オンラインのハイブリッド式で開催いたします。

最後まで、ぜひご参加ください。

ご一緒に有意義な議論ができますことを心より願っております。